



おおいた Organic Market

一般社団法人おおいた Organic Market

後藤 亜紀子 氏

学校給食への

有機栽培による農産物導入の取り組み

usuki farmer's market ひやくすた

佐伯市有機農業相談員活動レポート

佐伯市有機農業相談員

深瀬 隆治 氏



おおいた Organic Market

マーケットのはじまりと歩み

おおいたOrganic Marketは、毎週土曜日（第5土曜日を除く）の朝9時から12時まで、大分市街地のオアシス並木通り商店街で、大分県内の有機、自然栽培、自然農の生産者の方が農産物と加工品を直売するマーケットです。

マーケットを計画した当初から、海外のマルシェのように毎週開催して日常にある市場を開きたいと考えていましたが、商店街の歩道という公道を使うため、毎週開催の許可が下りませんでした。2012年12月8日に始まった、毎月第2土曜日の開催はオーガニックの啓蒙普及活動のイベントでした。当初は料理や健康に関するワークショップ、講演会、上映会なども並行して行っていました。

しかし、コロナ禍の際は休止を余儀なくされました。再開にあたって交渉の末、毎週開催が許可され、2020年からは

念願の「日常の市場」になることが出来ました。同時に、これまで飲食店の方に協力頂いていましたが、それぞれの方が独立して拠点を持つ時期になり、生産者の方のみの出展に方針を変更しました。

日常の市場が生んだ変化

その結果、自ら台所に立ち、料理をする人が野菜そのものを買いに来る市場になりました。生産者の方も加工品にも力を入れ、商品開発も加速しました。毎週、習慣として市場を利用するお客様のおかげで、小さな地域経済も回るようになってきました。作り手と買い手が直接、習慣的に会うという環境が、思った以上の変化をもたらしています。

マーケットが10年目になった時に、最初のキャッチフレーズだった「つくる人、たべる人が出会う場所」から「食べる人もつくるひとへ」と変化することにしました。理由は、生産者の皆さんだけに食

料確保の責任を負ってもらうのは、もう無理だと実感したからです。

食べる人が作人へ

毎年5月は「家庭菜園特集」として、定植して余った苗や堆肥などを販売し、生産者の皆さんには畑の先生になって頂いています。自分でも農産物を育ててみたい、というお客様が増えてきました。樹木医の吉野賢一先生、大分短期大学の橋本先生にご協力頂き、家庭菜園、家庭果樹相談コーナーを毎月開催し、2025年からは樹木講座と種まき講座もスタートしました。

また、恒例の11月開催、新米収穫祭を新嘗祭に改め、お米と田んぼと日本文化を見直す機会をつくっています。2024年は「田んぼしよう」、2025年は「田んぼの始めかた」をテーマに、商店街前の車道を歩行者天国にして開催しました。

お米や田んぼを知ることがは地域を知ることです。様々な勉強と発見を、出来るだけ多くの方と共有したいと思うようになりしました。

人と思いをつなぐ場所として

2012年、大分にUターンした私は、おおいた有機農業研究会の事務局長だった諫山さんに相談し、企画書をもって生産者の皆さんをお訪ねしました。「全てはつながっている」という言葉を、農業のことを知らない私に教えてくれました。

その考え方に触れる機会を若い世代にも届けたいと思い、ボランティアは学生さんに限定して、直接生産者の皆さんと触れ合える仕組みを作っています。

有機農業の世界は以前より認知され、若手の生産者の方も増えて来ました。大量生産大量消費の時代に逆らって有機農業の道を選択してきた生産者の皆さんの

信念と哲学と情熱が継承されていくことで、大分の「オーガニック」が豊かに日常になると信じています。

マーケットを始めて、一緒に協力して下さった生産者の方で鬼籍に入られた方も少なくありません。このマーケットでは定年制度は設けていません。いつまでも関わって頂き、道しるべになって頂きたいと思っています。

この地域で暮らすということは食べていく、ということ。手渡して食べものを受け取るたびに、沢山の人に守られて暮らせるという安心感を得られる場所であり続けたいと思います。

一般社団法人おおいたOrganic Market

後藤 亜紀子 氏

